〔書　評〕

「情の世界への旅」の追体験
滝沢秀樹著
『中国朝鮮族への旅 中朝国境の河、鴨緑江・豆満江北岸紀行』
（御茶の水書房、2005年4月）を読んで

金　美善

評者が、本書の著者・滝沢秀樹氏と初めて会ったのは、阪神大震災の1995年であったから、既に10年以上前の事になる。その間、何冊かの新著を頂いて来たが、この度の『中国朝鮮族への旅』は、評者の関心と重なる点も多く、学術書の体裁をとっていないだけに文章も（著者の著作にしては珍しく）平易で、一番楽しく読めたのが事実である。

それにもかかわらず、刊行間もなく著者自身から『地域と社会』誌上での書評を依頼されたとき、評者は少なからず当惑した。著者の「朝鮮族への旅」に同行したことがあり(2003年)、その時の事が評者の実名入りで本書の随所に書かれているだけでなく、本書の「主人公」達と言うべき朝鮮族留学生の何人か（実は大部分）は、既に評者とも個人的に親しい知人になっている。評者に「客観的立場」での書評を著すことは、およそ不可能である。著者の「情の世界への旅」を本書で追体験しながら感じた事の幾つかを、「情」に沿って断片的に記すことにならざるを得ないことを、最初にことわっておこう。

本書は「中国朝鮮族への旅」という題名であるが、実際の内容は、中国の朝鮮族を基点として南北朝鮮に広がる朝鮮半島の社会やそこに生きる人々への想いを、著者の時空間を超えた経験をもとにつづったものである。

本書の著者は長年、社会科学をフィールドに韓国の社会、歴史、経済、文学を幅広く研究してきた最先端の韓国研究者である。その積み重ねの成果は著者の著書のリストからも推察できるが、本書は今までの著者の科学的根拠を示しながら論じていた韓国社会もしくは朝鮮半島の事情についての語り方とは異なる方法、つまり紀行文のような親しみ易い手法で朝鮮半島について接近していることに面白さがある。実際、日本における朝鮮半島への視点は、学問上の観点であれ一般大衆の関心であれ、その本質が度外視され両極端を走り続けているきらいがある。研究の側面では対象の本質が政治性に絡んで論じられて重苦

しい反面、一般大衆レベルの関心は低俗になりがちで軽すぎる恐れがあるのも事実である。この面で本書は、紀行文という近づき易い性格の文体で両極端を補う形式をとっている。朝鮮半島へのアカデミックな観点だけでなく、大衆向きの興味本位のテーマについても軽いタッチで消化しているのである。勿論、一般的な紀行文の性格をもつが、単なる旅行の印象を綴った内容だけではなく、本書の中には、朝鮮半島を取り巻く東アジアの歴史、政治、経済、社会や現在の潮流であるグローバリズムまで、現在の東アジアの主要な論点が網羅的に視野に入り、学問的関心からも実に読み応えのある内容になっているのである。中国朝鮮族に内在する食文化、言語現象、女性の問題などを幅広く朝鮮半島全体、朝鮮民族と絡み合わせ展開しているところも興味深い。

とりわけ本書の際立った特徴は、幅広い著者の人的ネットワークに沿ってその「語り」が展開される点である。本書は著者の情的ネットワーク、つまり、日本人である著者と朝鮮民族に属する個々の人との情のつながりによって成り立っていると言っても、過言ではない。

本書は序章と五つの章からなる。その全ての部分を論評する余裕はないので、評者にとって特に印象深く読んだ箇所について、感想を述べておきたい。

序章では、生活の諸場面を朝鮮民族に囲まれ生活している、国籍はもちろん、血統的にも民族的アイデンティティーも正真正銘百パーセント日本人である著者の、コリアとかかわる個人史と中国朝鮮族との出会いのきっかけとなるコリアとの親和性について言及している。この親和性には、言うまでもなく著者のネイティブ顔負けの流暢な朝鮮語の駆使能力が支えになっている。独学で学んだ著者の流暢な韓国語は、コリアンとのふれあい、つまり様々なコリアンと混じりながら学んだものである。いわば自然習得によるものだが、自然習得の背景には著者のコリアンとの付き合いの濃度や時間的積み重ねの歴史が濃厚に表れている。

東アジア（東南アジアも含む）の近現代史における日本の歴史的責任を重視するところから成り立っていると言う著者の日本人としてのアイデンティティーも、朝鮮民族に対する親和性と関連し、評者を含む朝鮮民族の少なくない人々が著者に親和的になる要素であるかもしれない。

第一章「朝鮮族への旅」では、長年韓国社会を研究対象にしてきた著者の最後のライフワークとしての中国朝鮮族社会研究への決意や、研究へ取り組む予備調査のための朝鮮族社会訪問から話が展開される。飛行機の中での韓国人との出会い、空港に出迎えてくれた著者の勤める大学の中国朝鮮族の留学生と彼らの家族との出会いの中から、朝鮮民族の固有の「情の世界」を共有するようになる。日本では「情実」はマイナスイメージのことばであるが、著者は、日本の社会に観点をおいた意味としての「情」と韓国の人々のつながりに観点をおいた意味としての「情」、両者の意味を朝鮮族との指導教授と留学生との社会的関係において確認しつつ、朝鮮族への旅で捜し求めている。日本に生活する朝鮮族に対する日本社会、コリアン社会の無知について、「日本社会が多民族共生社会とは縁遠い、単一民族国家神話の呪縛から解放されていない」事実との関係性を指摘しながら、中国朝

鮮族の生活世界について興味と関心をもつようになった著者の中国朝鮮族への思いが、彼らとの社会的かかわりと人間的なかかわりとして紹介されている。

第二章「鴨緑江を遡って」の冒頭では、「金日成将軍の歌」が好きである「変な日本人」としての著者の北朝鮮観がつづられている。歌の歌詞に含まれる「矛盾」について根拠を述べ、金日成の抗日の歴史から北朝鮮へと話題が展開されるが、この歌の歌詞への三つの疑問（長白山と白頭山、鴨緑江と豆満江、北朝鮮の名称など一般的な歴史的根拠や常識に反する名称が歌詞に使われていること）についての知的好奇心を、歴史的根拠や事実で解決しようとしており、それが当地を訪れるきっかけになっていることがつづられている。それに関連して、鴨緑江を挟んで向こう側の北朝鮮社会に対する、著者の平壌での学会参加を機会にした訪問のときの経験や思いが冷静に語られている（実は著者の二度目の平壌の学会には、評者も参加した)。

冷戦構造が和らぎ、韓国の友好的な対北政策の影響で現在、韓国では北朝鮮に対するかつての反共教育の影は薄れつつあり、以前に比べれば想像出来なかった程、活発な人的交流が行われている。とはいえ、韓国社会内部では北朝鮮に対する親近感の表明にはまだまだ賛否両論があり、世代差をはっきりと見せている。その様な現状から見ても、著者の北朝鮮社会を見る冷静な姿勢には、学ぶところが多い。

第三章「豆満江を下って」に関しては、舞台となる地域の歴史的事蹟について評者の知見が余りにも乏しく、とりわけ「金日成偽者説」が広く流布している韓国社会で育った評者には、著者の語る抗日闘争の歴史についてのそれなりの学習なしには、論ずる事が不可能である。この分野の専門家に評は委ねたい。第四章「朝鮮族の街、朝鮮族の村」の後半部分にも、第三章に続いて豆満江辺が登場する。ここにも、評者も著者の指導する大学院留学生の案内で同行した、歌曲「先駆者」の歌枕となった龍井市の碧岩山、詩人・尹東柱の生家のある明東村など、多くの想いで深い地名が登場するが、聞くと、本書完成後の著者はこの地域により深く入り込んだ「旅」を続けているという。その「旅」の記録が公表される時、評者は改めてこの部分についても本格的に論評したい（現状では、この部分に評者の個人名が登場する頻度が高過ぎる！)。

第四章の前半部分では、2001年から著者が毎年訪問している遼寧省、瀋陽市の西塔やその周辺について書かれている。西塔には2003年に評者も同行した（2005年には、都合で参加出来なかった著者とは別に、評者は別のグループで訪問した)。大阪市生野区にある猪飼野（御幸森）コリアンタウン程度の広さであるが、そのコリアン性は町の景観からも大阪のコリアタウンとはその密度が違う。

意外にもこの章では、第二章に続いて北朝鮮に対する著者の関心がつづられている。西塔には北朝鮮から送られて来た出稼ぎ女性の働くレストランが多く、彼らの存在をしめす案内広告などが街に独特な景観を提供しているが、とりわけ日本や韓国、アメリカ等からのコリアン観光客にはその奇異（？）な風景はよい観光資源になっている。韓国からの観光客には憧れや神秘感すら感じさせられるのも事実であろう。著者が情感を込めて語る、北朝鮮から来た多くの従業員が働くレストランでのある少女との交流は、日本人男性とし

ての著者の朝鮮半島の人間との付き合いの「究極の形態」である。実は評者は本書刊行後の2005年秋の西塔訪問時に、同じレストランでその少女に会った。著者のことを「アボジ(お父さん)」と呼ぶ少女の笑顔に、驚きと感動が交差した。

一方、西塔では現在韓国の資本の流入が著しく、それがこうした北朝鮮の景観とともに街の景観に色濃くあらわれている。著者の目にうつった「ミニソウル・西塔」と「西塔にある『平壌』」の共存と、両方の資本のカラオケの歌の内容から、南北朝鮮に一歩先駆けた南北交流が実現していることを発見している発見的観点が興味深い。

最終章である、第五章「延辺朝鮮族自治州の州都・延吉」では、朝鮮族居住地域のバイリンガリズム、男尊女卑の慣習、女性の社会的流出、狗肉にまつわる食文化の話まで、その地域の特徴を幅広い関心をもって締めくくっている。中国の少数民族政策の一つとしての言語政策によって実現されている、朝鮮族のウリマル(私たちの言葉。つまり朝鮮語)の事情から中国のすばらしさと日本の情けなさを痛感したとする著者の在日コリアンの置かれた情況に対する認識が、中国朝鮮族の言語から再確認されたことが、理解出来るのである。

以上が本書の概略であるが、冒頭に述べた様に、著者の「中国朝鮮族への旅」には、中国朝鮮族の世界を基点として、中国、北朝鮮、韓国、日本と東アジアとの地域的関係、歴史・政治的関係がその周辺の様々なエピソードとともに描かれるが、そのエピソードに登場する人物との出会いや交流の内容が本書の面白さを更に増している。現地の中国朝鮮族はもちろん、日本に生活する朝鮮族、韓国からの観光客、在日コリアンオールドカマー、ニューカマー、平壌からの人々など実に様々な民族的根を共有する人々が著者の道連れとして登場する。その圧倒的多数が女性であることを、フェミニズムの立場から論評することは、敢えて避けよう。

本書の著者はこれらの朝鮮民族が、現地文化との接触によって創出された各自の異なる個性を持つことが語られ、それらの多様な人々との交流を通じて中国朝鮮族の理解や知識を広げていくのだが、評者としては現在の中国朝鮮族の問題は本書で扱われている地域に限定されず、更に空間的に広がっていく最中であることを指摘したい。空間的広がりは、韓国の経済発展に伴う中国との賃金格差による、韓国や中国国内の韓国企業進出地域とその周辺への出稼ぎ移動がほとんどであるが、現在韓国にはある推計によると約30万人以上の中国朝鮮族が労働の現場で働いており、日本にも約3万人(推定)の中国朝鮮族の人々が留学生として在留し、或いは労働者として働いている。これらの移動は朝鮮民族という民族的ネットワークに頼るものであるが、現在はその移動が北米のコリアン社会にまで拡散している。

2006年1月25日に創刊されたアメリカの中国朝鮮族コミュニティの情報誌『中国同胞ニュース(Chinese Korean News in USA)』によると、現在アメリカに生活する中国朝鮮族は4〜5万人にのぼり、彼らのほとんどが既に定着している在米コリアンのコミュニティ

と共生関係にあるとされる。それが可能になるのは言うまでもなく、コミュニケーションの道具である言語の共通性である。これらの言語の持つ機能性と民族的シンボル性の魔力は想像以上に効果を発するものであることが、朝鮮族の活動からしばしば確認される。

2006年の正月からアメリカのコリアン社会について現地調査を行った評者は、1月27日夕方に中国朝鮮族の正月の集まりに参加する機会をもった。こちらの中国朝鮮族の人口は約2〜3万人（推定）。中国同胞連合会を作り、機関紙も作った。彼らは中国からアメリカにわたってきて、すでに成功を収めているコリアンコミュニティの一員としてアメリカでの生活をスタートしている。その日、私の隣に座っている夫婦と話をする機会があった。旦那さんは、日本の東北大学の博士課程を中断して奥さんが先に渡っているアメリカに合流したそうだ。奥さんは8年前に日本に2年ほど生活してアメリカに来て、現在は会社の重役である。交換した名刺の自宅の住所をみると、中産層が居住する地域で、ある程度の生活基盤は構築できているようだ。

中国朝鮮族がアメリカでやっているビジネスや仕事を詳しく知ることはできなかったが、在米コリアンコミュニティの基礎の上に築かれた二次的な関係の中で生活しているのは確かであろう。集まりや機関紙のスポンサーは「ラジオコリア」、「ナグォン食品」などコリアンビジネスの関係者であった。言語使用や行動様式からは日本に住む中国朝鮮族とそれほど違和感は感じられない。故郷を意識しながら集まりを大切にすることは、中国朝鮮族の特有のものであると思える。しっかりとネットワークを構築して成功しようとしていることは、かつての韓国からの移民の決意と似ている。そのバイタリティーも同民族に共通するものなのかもしれない。同胞会の重役の紹介の際に紹介されたある人がおおきな

〈在米中国同胞春節パーティ〉2006年1月27日 ロスアンゼルス

声の朝鮮語で、「皆さんお金たくさん儲けてください」と、彼らの目的としてのアメリカンドリームを確固として語っているのが印象的であった。

そのバイタリティーに中国語、朝鮮語を生活言語とし、これから英語が加わるのだから、彼らのアメリカンドリームの実現はそれほど遠くないかもしれない。また、海外で居住するからこそ強まる民族的同質性の自覚と、すでに安定した基盤を築いている在米コリアンコミュニティの存在が、彼らのアメリカンドリームの実現への手助けになるのだと感じられた。

本書の内容から少し離れて、評者の最近の見聞について記したが、日頃の行動力から見て、著者の中国朝鮮族への旅は、東アジアにとどまらず、地域を広げてこれからも続きそうだ。

最後に、本書に接して感じた評者の多少の違和感についても、触れておきたい。

先に述べた様に、本書には、著者の朝鮮半島（の人々）との「情の世界」のやり取りが色濃く反映されている。日本社会ではとっくに失われ、韓国社会でも今や急速に失われつつある「情の世界」に惹かれ、感動するのは、「韓流ブーム」に追われる日本人の典型と似ているところがある。評者が見るところ、日本人のアジアへのまなざしには一貫して「失われたもの探し」という、ステレオタイプ的なイメージがある。韓国を含めアジアの旅先での印象を記す日本人の旅行記に一貫した観点が、本書でもうかがえるのは事実である。勿論、本書はもともと「情の世界」を描くという意図で企画されたものだから、そのような観点からでも十分に読み応えがある。

しかしながら、著者の《旅》の一部に同行者として中国東北地方を訪問した評者にとって、中国朝鮮族の存在は、「純情探し」の余裕がなかったせいもあっただろうが、「情」よりは「たくましい生活力」を感じさせる世界を見せてくれたのだった。同じ民族でありながら生活地域は異なる評者にとって、中国朝鮮族が生活の諸場面で中国社会に融合しながらも集団で起ち上がる行動パターン、驚くほどの唐突さと挑戦力、行動力から、怖いほどのバイタリティーを感じさせられたのだ。日本人としてノスタルジアに浸る余裕を持つ著者が、その朝鮮族社会固有のバイタリティーを感じ取っていないのではないかというのは、筆者だけの感想だろうか。

評者の興味本位で、やや人文学的観点に絞った書評になってしまった。社会科学への勉強不足を実感したところでもある。妄言多謝！